

70 『日本書紀』の中の身体に関わる表現

計 良 吉 則

『日本書紀』は天武天皇の皇子舎人親王が元正天皇の命によって編修し、養老四年(七二〇年)に完成したといわれる。壬申の乱後の天武朝の諸政一新、律令国家建設の一貫として開始されたものであった。そこには古代国家成立の由来、大和朝廷による全国統治の所以と正統性を内外に顕示することが、その最大の目的としてあった。

神話を含む歴史書である『日本書紀』の中には身体に関わる表現が多くみられている。それらに着目し、考察することは古代を知るうえで意味があると思われる。

一、身体の動作や状態を示す表現

まず特徴的なのは、「到る」や「往く」、「投げる」などの体の移動や運動に関するものが多いことである。卷

第一神代下に「遂到^二出雲之清地^一焉」、「是後天照大神復遣^二天熊人^一往看之」、「因曰、自^レ此莫過、即投^二其杖^一」とある。

また生死に関する表現も多く、卷第二神代下に「根裂神之子磐筒男・磐筒女所^レ生之子経津主神」、「即其矢落下、中^二于天稚彦之高胸^一、因以立死^二とある。

次に「有る」や「居す」などの存在を表すものもみられ、卷第三神武天皇に「時有一漁人、乘^レ艇而至」、「徙入^二吉備国^一、起^二行館^一以居之^二とある。

「娶る」に代表されるような、婚姻に関するものが随所にみられ、卷第二神代下には「来到即娶^二顯国玉之女子下照姫^一」とある。

一方、「憂う」、「憤る」などの感情、精神作用に関するものも多くみられる。卷第五崇神天皇に「何憂^二国之不^レ治也^一」、「是以既経^二年月^一、猶懷^二恨忿^一」とある。

また病的状態に関するものがみられ、卷第六垂仁天皇に「既身体悉瘦弱、以不^レ能^レ祭^二、若有^二狂婦^一、成^二兄志^一者^二とある。

容貌などに対する美的表現がみられ、巻第七景行天皇に「及_レ壮容貌魁偉、身長一丈力能扛鼎焉」、「曰_二弟媛_一。容姿端正」、「名曰_二八坂入媛_一。容姿麗美、志亦貞潔」とある。

そして老若に関する表現もみられている。巻第十応神天皇に「亦問之、長与_レ少孰尤焉」、

「是年耆之雖_二致仕_一、不_レ得_レ忘_レ朝」とある。

体の清潔に関するものもみられ、巻第五崇神天皇に「兄謂_レ弟曰、淵水清冷。願欲_二共游泳_一」とあり、巻第九神功皇后に「是以今頭滌_二海水_一」とある。

二、身体の部分や分泌物を表現したもの

巻第一神代上についてみると、四肢に関するものが最も目立つ。特に手や足を表現したものが多く、第五段に「乃以_二左手_一持_二白銅鏡_一、…右手持_二白銅鏡_一」、「在_二足上_一曰_二野雷_一」とある。

胸、腹、背など躯幹を表すものもみられ、第五段に「在_レ胸曰_二火雷_一、在_レ腹曰_二土雷_一、在_レ背曰_二稚

雷_一、「腹中生_レ稻」とあり、第六段に「又背負_三千箭之鞞与_二五百箭之鞞_一」とある。

頭部や顔面についてもみられ、第五段に「此神頭上生_二蚕与_レ桑_一」、「然後_二左眼_一…復洗_二右眼_一…復洗_二鼻_一」、「寧可_下以_二口吐之物_一、敢養_上我乎」とある。

また分泌物を表したもので、涙、血、唾、洩、息などがみられ、第五段に「其淚墮而為_レ神」、「又曰、斬_二軻遇突智_一時、其血激越」とあり、第七段に「亦以_レ唾為_二白和幣_一、以_レ洩為_二青和幣_一」、第六段に「而吹出氣噴之中化_二生神_一」とある。

(順天堂大学医学部医史学研究室)